

続

徒然  
つれづれ

## 東京は怯えている都市か

桑野 巍

東日本を襲った自然災害や人災はまだまだ続いており悲しい。悲しい表情はできるだけ見せたくない、とくにメディアに見せたくないという人たちは多いが、現場取材した後輩たちは悲痛な表情は消えていないという。それに引きかえ関西地方は「なんと平和で平穏なことよ」とひとりつぶやく。東北や関東地方の放射線量地図を見ながら「むごたらしさ」も感じる。地図には載っていないが東京が「怯えている都市」にも映る。東京に住むかつての同僚たちは「電車に乗っていても東京は以前よりも暗い感じがする」というからだ。いつになったら東日本は明るくなるのだろう、と同情したくもなる。時代を少し遡ってみる。

20数年前、知識人たちが将来関東平野の人口は5,000万人、東京は3,000万人が適正規模と唱えていた。当時遷都論や分都論が盛んで、米国やブラジルの首都制度を調査研究する学者もいた。また、東京都を拡大して東京都千葉県とか埼玉区という形が望ましいとする新首都制度を提案する便乗学者も現われた。その後、遷都、分都、新首都制度は実現不可能と分かりあらゆる面で東京一極集中が加速していった。

東京大都市擁護派たちは鼻高々だった。高級な音楽会を地方で開催しても人は集まらず採算がとれないが、東京で開催すれば人は集まる。人が集まれば何をやっても食えとまで主張。例えば大学生も地方ではバイトをしながら食っていくことはなかなか難しいけれども東京なら十分暮らしていけるし、文化に接する機会が多いから精神文明を産む引き金になると東京礼賛論は続いた。

経済学者は人口増と地価の値上がりを心配しつつも、資金の集中度や背後の生産力や消費力は高まり、良い意味で“東京は世界の商店街”になり、世界的にプレステージが上がるということが証明されようと予測した。ところが多くの住民たちは地価高騰によって何がしかの摩擦が生じて不健全現象が起きると地価

アレルギーに罹り、真面目なサラリーマンは自分で買えるのは日常用品ぐらいで、一生かかっても一坪の土地も買えないと嘆く有り様。

それでも東京は現在人口1,300万人の立派な首都を続けている。かつて英国のサッチャー首相が東京を訪れた際、皇居周辺を車窓から眺め「世界の中でも実によく整備された首都」と折り紙をつけてくれたことで、都庁首脳部は自信を深めた。友人の都庁元幹部にこの話を持ちかけたら、彼は「天変地異はいつ起きるかわからない。首都機能をバックアップする都市は必要」と言い、東京一極集中は2050年には解消されるだろうと言い、東京成長の限界を予測した。どうしてなのか。それは土地問題と水の不足、ごみの処理問題で行き詰まるからと本音を吐露した。

東京をこよなく愛する彼はそのころまでに皇居を京都に移すかもしれないと言い「京都の人たちは移転を快く受け入れてくれるだろうか。京都はそろそろ準備を始めるべき」と個人的意見を話してくれ、京都人はどう受け止めるだろうか聞いてきた。皇居が京都へ移るかもしれないという話が出て驚いたが、もともと京都人とくに古い人たちは「いずれ天子様は京都にお戻りになる、と信じていたから不自然な話ではない」と答えておいた。

3.11の事故事件の跡始末は続いているが、これが日本社会の大きな転換期となっていることは否定できない。首都東京でさえ「怯えている都市」と位置づけられ、東京限界説や皇居移転論を呼び、不名誉な「不自由な都市」呼ばわりされている。この先東京がどう格上げに取り組んでいくか。同時に全国の自治体のトップ的な存在の東京都が苦悩を続けている東日本地域の区市町村の助言役を買って出て、連携を強めて住民、公共団体の悩みを取り除いてくれるか、リーダー役を果たしてくれるか注目したい。

(自治大阪編集委員会顧問  
時事通信社元大阪支社長)